

## 旧藩の時務意識と図書館の成立：八戸市立図書館の由来をめぐって

伊東, 達也

<https://doi.org/10.15017/6769074>

---

出版情報：教育基礎学研究. 19, pp.21-34, 2022-03-25. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



# 旧藩の時務意識と図書館の成立

— 八戸市立図書館の由来をめぐって —

伊 東 達 也

## 問題の所在

本研究は、近世から近代への転換期に日本各地に設けられた図書館の実例に基づき、近代公共図書館の概念が受容される過程を確認して、図書館観をめぐる合意がいかんして民意の中に醸成されたかを解明することを目的としている。そして、これにより近代公共図書館の制度と思想が日本社会に位置づけられていく過程を構造的に示すことをめざす。

従来議論が重ねられてきた近世教育と近代教育の接続の問題を読書施設について見ると、近代図書館のコンセプトを受け入れることのできた近世の読書施設を図書館の日本的底流としてとらえ返すという視点を得ることができる。前近代の読書施設と近代公共図書館との接続については、これまで「木に竹を接いだ」ようだと評されてきた。小川徹は、従前の日本の図書館史では、近代の図書館は近世の文庫とは断絶したところから発生したものとして描かれており、そこにこそ日本の図書館の特異性が存在するように語られてきたことを指摘しているが<sup>1</sup>、このことは、教育史研究における近代研究者の側の「近世」への軽視<sup>2</sup>のような状況が、図書館史研究においても生じていたことのアラわれであろう。

新谷恭明は、近世の学校から近代の学校への接続について、「制度としては断絶させられたとしても、意識的には繋がっているということはある。教育というのはそういう精神的な部分を含んでいるからである」<sup>3</sup>と論じているが、学校だけでなく読書施設についても、近世と近代は「意識的には繋がっている」といえるのではないだろうか。とするならば、文庫や貸本屋などの近世の読書施設と近代の図書館とは全く断絶した存在ではなく、それらの概念や機能は明治期以降にも受け継がれ、そうした近世的心性が近代を受入れるという葛藤のなかで、図書館観をめぐる合意が民意のなかに醸成されていったと考えられる。

近世の読書施設との接続がうかがわれるおもな事例に、明治・大正期に各地に設立された公立の図書館や、その前身となった読書施設がある。県や市の事業として図書館の設立が企図される際に、その地域の旧藩主家からの寄贈図書が蔵書の中核となった事例は多いが、明治10年代に設立された公立書籍館や20年代以降の地方教育会による図書館が、新知識の摂取や直接的に教育活動に資することを意図して旧時代の文化との断絶を

生じる傾向があったのに対し、旧藩領域をサービス対象に設定して設立された図書館においては、藩校蔵書など旧藩の文化遺産が継承されることが多く、そこに新旧文化の融合が生じたといわれている<sup>4</sup>。しかし、近代図書館を受け入れる底流としては、旧藩蔵書の継承だけでなく、それらを含んだ旧藩の教育政策やその延長上にある明治期以降の旧藩主家による旧藩領に対する支援事業等を想定すべきであり、そのような政策の継続と進展の背景には、幕末から明治への時代の転換に適応した旧藩士民の「時務」の意識、すなわち、自ら生きている「今」の状況（時務）に応える、時勢に応じた価値判断が作用していると考えられる<sup>5</sup>。

「時務」とは儒学用語で、島津斉彬によれば「時勢を考」え「時勢相応ノ政務ヲ執行」<sup>6</sup>することをいう。尊王攘夷イデオロギーを形成した水戸学の大成者、会沢正志斎の晩年の著作に『時務策』があり、横井小南にも「時務策」と題された藩政改革論がある。「時務策」とは律令制では政治の要務に関する方策のことをさすが、「時務を知るは俊傑に在り」ともいわれるように、幕末・維新の変革期においては、志士とよばれた個人だけでなく旧藩組織自体も、この時務意識の有無が、存続に大きく影響した。

そこで本稿では、八戸藩士の読書組織を母体として成立したとされる八戸書籍縦覧所と、それに接続した八戸書籍館・八戸市立図書館の事例により、このことを確認する。

八戸市立図書館の前史については、先行研究として『八戸市立図書館百年史』（八戸市立図書館、1974年）がある。同書は、1874（明治7）年に開業した八戸書籍縦覧所と、その母胎であった八戸藩士の読書組織「書物仲間」を現代の八戸市立図書館の前身であると位置づけた最初の研究成果であり、残存史料の少ないなか、蔵書や蔵書印だけでなく書籍の表紙芯紙や裏書などの情報までも整理・公開している貴重な業績であるが、図書館史としての記述の中心は明治期以降にあり、書物仲間から書籍縦覧所・書籍館への転換についても、「古い不要になった建物と書物の組合せをもって、新たに発足した教育の制度に転用して活用」した八戸地方の「地域一般の風」という解釈にとどまっている<sup>7</sup>。また、書物仲間の発生時期については、1828（文政11）年以後であるとの見解を示しており、そのことと藩の政策など当時の社会的状況の関係についても、同時期に設立された藩校の影響以外は言及されていない。本稿は、この『八戸市立図書館百年史』の成果に依拠しつつ、上記「時務」意識が読書組織・施設の成立に及ぼした影響に注目して考察を進める。

## 1 読書組織「書物仲間」の成立・変化の時期とその背景

八戸市立図書館（八戸書籍縦覧所・八戸書籍館）の前身については、従来、八戸藩二代藩主南部直政のつくった「観学舎」という文庫がもとになったという説<sup>8</sup>と、藩士の読書組織である「書物仲間」のうちの「大仲間」がもとになったという説<sup>9</sup>の二説が行われている。このうち「観学舎」については、現在のところその存在が証明されていない

いが<sup>10</sup>、「書物仲間」については、数種の蔵書印や目録などの関係書類も現存し、その成立の時期や変遷に関していくつかの説が出されて検討が進められている。それぞれの成立時期については、藩内にそのような読書組織が必要とされる背景として、時々の「時務」意識が生じる事情があったことがわかる。

#### (1) 書物無尽仲間：1753（宝暦3）年、1772（安永初）年頃、1781（天明初）年頃

八戸書籍縦覧所の直接の母体となった「大仲間」（及び「小仲間」）の前身と考えられるのが、18世紀以来その存在が確認されている藩士間の書物共同利用組織「書物無尽仲間」である。この組織の発生時期については、現在のところ、1753（宝暦3）年頃<sup>11</sup>、1772（安永初）年頃<sup>12</sup>、1781（天明初）年頃<sup>13</sup>の三説が行われている。1783（天明3）年の八戸藩御目付所日記には次のような記事がある。

一、書物無尽惣仲間より以書付、仲間書物無尽錢、兼而舩所江願上置、書籍差下候、然ル処当時舩所惣有高大凶式十貫文程罷成申候、当年希年凶作ニ而一統及難儀申候、依之当利分江本錢相加配分相続之為にも仕度奉存候、何卒御繰合七百貫文御渡金被成下候様仕度旨、願出<sup>14</sup>

これによれば、藩士の積立金を管理していた「舩所」で書物無尽が行われており、これに伴う金銭の移動も生じていたことがわかるが、鈴木淳世は、1776（安永5）年5月に八戸藩士織壁徳太夫則永が八戸城下の商人石橋庄藏英寿あてに出した「書物無尽永代売券状之事」という書状の内容から、八戸藩士が「御家中仲間書物無尽一口分」を担保にして商人から借金をしていたこと、さらに「仲間書物無尽」が、他人に譲渡可能な書物の共同利用権としての性格を有するものであったことを明らかにしている<sup>15</sup>。

八戸藩は元禄期以降、慢性的な財政難の状態にあり、その解決の目途がつかないまま宝暦飢饉・天明飢饉などに対処しなければならぬ状況であった<sup>16</sup>。家中には儉約奨励と知行借し上げが常態化し、事実上の禄高削減で藩士の生活は困窮していた。そのような場合の相互扶助の手段として、参勤交代の費用を補う「舩」が活用されていたが、この制度は後に商人や農民も対象とする広範囲な金融制度へとつながっていく。この時期の書物仲間が、藩の公的な「舩」制度の一環として運用されていたことがわかるが、一方で、宝暦から天明にかけてのこの時期は、五代藩主南部信興が、1744（延享元）年に駿河城の警備を担当する「駿河御加番」を命じられたことを契機として甲州流軍学に基づく藩の軍制が整備され、藩士の間では特に甲州流軍学を学ぶことが奨励され重んじられていた時期でもある<sup>17</sup>。実際に1789（寛政元）年5月に発生した蝦夷地クナシリ・メナシ地方におけるアイヌの人々の蜂起事件（寛政蝦夷蜂起）鎮圧派兵の際には、甲州流軍学に基づいた隊編成が行われている<sup>18</sup>。小林文雄は、1843（天保14）年以前に成立し

たと推定される荒木田家「八戸書物仲間記」によって、この頃の書物仲間（後の大仲間）の蔵書には兵学や政治思想・古典の注釈本が多いことを指摘しているが、書物無尽仲間は、このような時代状況に対応するための藩士の危機意識、すなわち、生活困窮のなかにあっても兵学を学び、当時の状況（時務）に応じようとする意識のなかから、個人の蔵書不足を補うための相互扶助の手段として発生し制度化されたものと考えられる。

## （2）理顕印仲間：1830（天保初）年頃

「理顕」印を使用する書物仲間は、後に小仲間と称される組織で、1830（天保元）年頃に成立していたと考えられている。この時期は八代藩主南部信真の治世にあたるが、文政改革とよばれる藩政改革（主法替）を断行し、思い切った経済政策で藩財政の立て直しに努めた時期である。

この改革の背景には、1808（文化5）年の蝦夷地警備の功績により高直り（加増）を成功させた弘前藩と盛岡藩の動向に触発された藩主信真が、八戸藩の家格上昇をめざして幕府に対し内願書を出し続けていたことがあるといわれている<sup>19</sup>。信真は、改革の責任者として野村武一（軍記）を家老に登用するとともに「御調所」とよばれる産物会所を新設して改革を進めたが、主な政策としては、領内の産物を買上げて江戸や他領で販売する専売制の導入と、それに伴う御用商人の統制、新田開発と築港計画、綱紀肅正と文武奨励などがあげられる。藩財政の再建に伴い、藩校を設立し、藩主家ゆかりの御殿や社寺を造営したことは、藩主家の威信を高め、家格上昇につなげるねらいもあったものと思われる。

専売制の対象となったのは、大豆などの畑作物とメ粕・魚油などの海産物、塩、鉄である。特に主要産物である大豆については、既存勢力を排除して新たな御用商人を登用し、強力に専売化を進めている。また新田開発と並行して、天明飢饉以来混乱していた土地所有を整理するための領内検地も行われ、1823（文政6）年には大野鉄山を藩宮鉾山として鉄の専売も実施した。

このように、文政改革は商業・流通を活性化しただけでなく、領地整備をすすめ、藩校教育を中心とした学問も盛んにしたといえるが、財政面では1830（天保元）年には1500両の囲い金（余剰金）ができて藩財政は潤ったものの、結局それは領内経済の回復には結びついておらず<sup>20</sup>、そのまま1833（天保4）年の天保飢饉の年を迎えることになる。

天保飢饉では、八戸藩は生産の八割を失ったといわれているが、改革の責任者の野村軍記は一切の救済措置を行わず、一日につき「稗三合」と定めた領民の食料以外の穀物を強制的に買上げて専売したため、八戸城下だけでなく周辺の村々までも広がった大規模な一揆が起きている。

この「稗三合一揆」の結果、藩は専売制を一部見直し、農民への資金貸付や他領から

の米穀買入れなどの救済策も行った。これに伴って1834（天保5）年1月には責任者の野村軍記が罷免され、野村につながる代官・下役・村役人が更迭される結果となった。

「文武講習所」と総称された藩校は、文政改革の一環として野村軍記の尽力により1829（文政12）年に城内二の丸に開設されているが、これはもともと1809（文化6）年に設けられた武芸稽古所を拡充した施設で、学芸を学ぶほうを「学校」、武芸を学ぶほうを「稽古所」と称していた<sup>21</sup>。武芸稽古所は、文化年間以来、八戸の沿岸にも異国船の出没が重なり、沿岸警備の強化のための兵力配備が必要になったことに伴って設けられたものである。開校当初の藩校「文武講習所」の講習科目<sup>22</sup>をみると、依然として武芸を中心とした内容であったことがわかるが、注目すべきは、1832（天保3）年11月に、この藩校に対して藩所有の四書五経などの儒学書460冊が貸し出されていることである<sup>23</sup>。

次いで1833（天保4）年には、秋田藩から菊地大叔が招聘され、医学と儒学が教授されたほか、八戸藩士で朱子学者の齊藤金弥、室岡元らが教員に任命されている。八戸藩の藩校はこの頃から武芸のほか儒学の充実も図るようになったものと思われ、兵学のほかには、和学・漢学・洋学・医学（漢方・蘭方）・算法・筆道・習礼などが講習されていた<sup>24</sup>。

西村嘉は、八戸藩の上級藩士の教学歴を検討した上で、藩校について「武備の拡充を迫られるという状況のもとで、給録がすくなく自費で師範につくことのできない中下級藩士の子弟の教育を主な対象とし、教学の内容はそれほど高度なものにまでわたらない」のではないかとしているが<sup>25</sup>、1828（文政11）年に藩校ができたことが一般に教学の気運を刺激したことは確かであり、「理顕」印を使用する書物仲間は、藩校の開設と同時期にその存在が確認されている。

1828（文政11）年頃に記されたと考えられる理顕印仲間の「定目」と「心得書」をみると、この書物仲間について「此度仲間書物無尽相企候」と、書物の共同利用（無尽）のための組織であることのほかに、「賄等之儀ハ連中申合奢り間敷儀無之専質素ヲ第一と可致事」とあるように、時には集会も行われており、「席専睦敷合可申」や「組合仲間引廻可致」、「仲間之内格別不行跡之方有之候ハハ一統異見相加候」のように、仲間は親睦を旨とし、仲間に行跡があれば意見を直させるような、相互研鑽のための勉強会のような性格の団体であったことがわかる<sup>26</sup>。

理顕印仲間が発生した天保初年頃は文政改革の絶頂期であり、従来からの書物無尽のための組織であるとともに、藩校に学ばなかった上級藩士や、藩校を卒業した青年藩士が中心となって、理顕印を仲間のしるしとする書物仲間が結成されたのではないかと考えられる。前田勉は、読書を目的とした結社について「藩校のなかで会読が学習方法としてとり入れられるようになると、日を定めて、藩校教師も出席する公的な会読を行うとともに、生徒間での私的な会読も容認され、むしろ積極的に勧められるようになる」とし、そのような私的な会読集団が結社化していくことを指摘しているが<sup>27</sup>、18・19世

紀の日本では、全国的にさまざまな場所で、「何々社」「何々連」というサロンが開かれていた<sup>28</sup>。理頭印仲間の発生が藩校の設立と同時期であり、その影響を受けているとすれば、会読などの共同読書も行う私的な結社（サロン）としての性格をもつものであったとも考えられる。

西村嘉は、理頭印仲間の性格について「学ぶ姿勢は相互研鑽で、仲間同士は家柄の座列別段という心得書をかかげて階級社会のなかに別な視点をもちこんでいる…これら青年たちの背景には、封建制度がまさに崩壊し去ろうとする前兆があった。彼らが仲間のしるしとして理頭という印を使用しているのは偶然ではなかったのかも知れない」<sup>29</sup>としているが、共同読書としての会読の原理には「相互コミュニケーション性」と「対等性」がある<sup>30</sup>。前田勉は、19世紀の会読が政治問題の討議の場になっていくことを指摘しているが<sup>31</sup>、「座列」をなくして対等にコミュニケーションできるサロンとしての理頭印仲間は、まさに藩政改革に関する政治課題や、時勢の動向について議論をたたかわせる場であったかもしれない。

それまでの「書物無尽仲間」の活動に集会・結社の機能が少なく、会読の全国への普及を寛政年間（1789-1801）以降<sup>32</sup>と考えるならば、この理頭印仲間と称される書物仲間は、文政改革が行われ、藩校が設立されて教学の気運が高まった当時の八戸藩士の「時務」意識によって、従来の「書物無尽仲間」のなかから、自然発生的に生じたものと考えられる。

### （3）大仲間・小仲間：1855（安政2）年頃、1843（天保14）年頃

この「理頭印仲間」が「仲間書物印仲間」に変わり、ついで「小仲間」と称されるようになることが確認されているが、「仲間書物」印に「小」印が併用されるようになったのが1855（安政2）年である<sup>33</sup>。

西村嘉は「理頭印仲間」から「小仲間」に至る書物仲間の質的变化について、理頭印仲間の構成員が「年とともに藩務に従事するようになれば当然のことながら藩の機構に組み入れられ、やがて責任ある地位につくものもでてくると、しぜん分別もつき、その考えかたや行動も、しだいに体制のなかに埋没するのはさけられない…ここでこの仲間は、書籍の共同利用という機能を前面に出さざるを得ないことになる」<sup>34</sup>として、理頭印仲間が同志的結社から書物共同利用組織に移行したことについて、その機能が後退したように評している。しかし、理頭印仲間が同志的結社として活動した間も、従来の「書物無尽」としての機能を失わなかったこと、相互研鑽のための会読会としての性格を継続したからこそ、後にまで存続したものと思われ、そして、この「書物無尽」という書物共同利用の性質こそが、書籍縦覧所や近代図書館への転換・接続につながったといえるだろう。

八戸書籍縦覧所の母体となったのは「大仲間」であるが、この「大仲間」ができた

きには既に「仲間書物印仲間」が存在しており、それぞれを区別する必要があったため、「大」（大仲間）印と「小」（仲間書物印仲間・小仲間、以前の理頭印仲間）印が使用されることになったものと考えられている<sup>35</sup>。

大仲間が成立したとされる1855（安政2）年は、ペリー来航（1853年）の直後にあたる。アメリカとの和親通商について当時の九代藩主南部信順は、「通商を一旦許可している間に武備を固め、その上で断るのが平和的」<sup>36</sup>という考えを表明しているが、藩を挙げて砲術を中心とした軍備の増強が進められており、藩士の間でもその必要性が強く意識されていた時期であった。

当時出された藩政改革意見書にも西洋式兵学による軍制改革案があり、江戸や鹿児島に留学した藩士らが中心となって、藩の軍制に西洋砲術や洋式兵学が導入され、さらに開国後は、藩士に対し西洋流の訓練を行うよう勧告がなされているが、その場合も、ただ西洋流を学ぶのみではなく古来の武学もあわせて学ぶように指示されている<sup>37</sup>。

このような時期に、既存の理頭印仲間（仲間書物印仲間）に加えて組織されたのが「大仲間」である。大仲間の蔵書には「大仲間書物」という蔵書印があり、現在八戸市立図書館所蔵の2588冊が確認されている<sup>38</sup>。これらの書籍には「大仲間書物」印のほか、「寄書」「外預」「八戸文庫」等の印のあるものがあり、その大部分は「寄書」印のあるものである。そして「寄書」印のあるものには、あわせて他の蔵書印のあるものが少なくなく、それが八戸藩士の蔵書印であることが明らかなものが多い。このことから、大仲間の蔵書は出資金を集めて購入したものではなく、寄託・寄付された書籍によって成り立っていたものと考えられている<sup>39</sup>。

同志的結社として成立し、成員も固定しがちであった理頭印仲間に対し、より多くの藩士が参加した共有蔵書の利用組織であった大仲間は、まさに激動する幕末の時代情勢に対応するための、八戸藩士の「時務」意識によって組織された書物仲間であったといえるだろう。

## 2 八戸書籍縦覧所の開設と時務意識

八戸書籍縦覧所（八戸書籍館）の前身が書物仲間のうちの大仲間であるという説の根拠となっているものに、1881（明治14）年、明治天皇の東北巡幸に際して三戸郡公立八戸中学の教師であった渡辺村男が、古記録や古老の説話によって著した『八戸見聞録』の記事がある。

大仲間ノ面々、唯仲間中ニテ披見スルヨリハ寧公衆ニ閲覽セシムルに如カスト決シ、舊主君ヨリ御物見ノ御家ト、御文庫ノ御蔵書ヲ拝領シ、一の書籍館ヲ堀端小学校ノ構内ニ設立シタリ、其時ニ仲間ヲ有志輩ニ募リシニ、百五十名ヲ得タリ、此仲間ヨリ創業費一圓ツヽヲ出シ、之ヲ維持シ来レリ<sup>40</sup>

書籍縦覧所の創立にあたって中心的役割を果たしたのは、大仲間の代表者で書籍の保管責任者の逸見興長であったが、逸見が残した記録にも次のような記事がある。

戊三月二十三日御私邸に御建相成居候御物見四間半に四間二階付大仲間無尽金ニ而金五十円ニ頂キ取解シ候而堀端町学校屋敷内ニ四月五日設立柱建致候事 世話取締新宮興運殿逸見興長 加談中里好雄殿湊李通殿 諸事金銭仕払係興長取斗候事 書籍縦覧所ニ致候事<sup>41</sup>

大仲間の書物に旧藩主家の蔵書を加えたものが、創立当初の書籍縦覧所の蔵書であったことがわかるが、このとき加えられた「御文庫ノ御蔵書」とは、「藩庁図書」や「八戸文庫」の印のある藩校の蔵書であったことがわかっている<sup>42</sup>。これらは藩校廃校後も南部家で保管されていたが、書籍縦覧所開所三箇月後の1874（明治7）年9月、管理運営組織として「弘観舎」が発足したことを契機に、南部家から弘観舎に移管されている。

書籍縦覧所の開設・運営にあたり、大仲間は規則改正を行い、新規入会者も含めた組織改編と役員改選を実施している。従来世話取締二人と加談二人だった役員を会頭四名で運営することとし、同時に組織の名称も「大仲間」から「弘観舎」に改められた<sup>43</sup>。弘観舎の会頭となったのは、逸見興長、新宮興運、中島渚、栃内吉忠である。このうち逸見興長と新宮興運はともに藩主一門の家柄で、番頭座上という家老・中老に次ぐ重職も務めた上級家臣であり、中島渚はもと八戸藩の江戸家老（江戸留守居役）であった。もう一人の栃内吉忠は、もと藩の儒学教授・軍学師範で、幕末には勤王派の藩士も集ったといわれる私塾「栃内堂」を主宰していた人物である。明治7年当時は発足したばかりの八戸小学の教育責任者で、第十七中学区取締でもあった<sup>44</sup>。

旧藩の重臣が中心となり、旧藩主家の支援のもと書物仲間の書物に藩校の蔵書も加えて、城の物見櫓の建物を利用して設立したのが八戸書籍縦覧所であるが、書籍縦覧所が学校の敷地内に設けられたということと、その責任者であった栃内吉忠が書籍縦覧所の運営に深く関わっていることが注目される。

西村嘉は、書籍縦覧所と学校教育との関係について、従来から大仲間書物が藩校にも貸し出されていたことに加え、発足当初の八戸小学には「学制」に対応した教育用参考図書が乏しかったことから、「新しい学校教育に役立てるとともに、当時指導的地位のものたちの連絡拠点とすることも併せて、学校屋敷内に大仲間が中心となって書籍縦覧所が創設された」<sup>45</sup>としている。藩校教育を補う役目を果たしていた書物仲間の伝統を継承した上で、新時代に対応するための新知識の導入だけでなく、設立当初から、後の教育会図書館のように直接的に教育活動に資することも企図されていたとすれば、この点には、旧藩主家にとっての「時務」、すなわち旧藩主家や旧藩組織が新時代を生き抜いていくために必要な、次代の人材を育成する学校教育の充実を図るという意識があらわれ

ているといえるだろう。

### 3 観学舎伝承の復活と書籍縦覧所

八戸書籍縦覧所の由来が、第2代藩主南部直政のつくった「観学舎」にあるという説の根拠になっているのは、以下の『教育新誌』の記事である。

青森県下ノ八戸書籍縦覧所ハ原旧八戸藩主南部直政其ノ家臣ト謀リ、寛文九年諸子百家ノ書ヲ集メテ観学舎ト名ツケ志アルモノヲシテ来リ覽セシメンコトアリシヲ、時勢変遷に随ヒテ漸将ニ廢頽ニ属セントス、直政九代ノ孫南部栄信コレヲ歎キ新ニ書籍ヲ購求シテコレヲ旧本ニ併セ、改メテ縦覧所ト称シ貴賤老幼ヲ問ハス各自欲スル所ノ書ヲ縦覧セシメンカ為ニ明治七年五月私立セシ所ナリ<sup>46</sup>

この「観学舎」が成立したとされる1669（寛文9）年は、幼年の二代藩主南部直政襲封直後にあたり、八戸藩草創期といってもよい時期である。初代藩主暗殺の風聞もあり藩の存続さえ危ぶまれる状況であったと考えられ、その存在を証明する史料も現存していないところから<sup>47</sup>、「観学舎」という読書組織の存在自体が疑問視されているのが現状といえるが、これに関しては、逸見興長の作と思われる書籍縦覧所の「設立趣意書」に以下のような記事がある。

今般縦覧場設立ノ儀ハ旧主家南部二代ノ祖直政君ノ遠慮ニ因リ、大仲間ヲシテ万卷ノ書物ヲ貯蓄セシメ、百十年以来連綿今日ノ域ニ到リ、我八戸中普ク智識ヲ開ク者、噫呼誰カ此恩沢ヲ蒙ラサル者アランヤ<sup>48</sup>

先述のように、書籍縦覧所設立にあたって中心的役割を担ったのは逸見興長であり、『南部家御家扶所日記』によれば、書籍縦覧所の設立に関しては、その発起・立案から建物の取得、開所に至るまでの南部家との連絡・相談・交渉の一切を逸見が行っていたようである<sup>49</sup>。

当初逸見は、南部家の私邸であった「御物見」の建物を大仲間の資金で買い取り、それを学校敷地内に移築して書籍縦覧所とする建設工事を開始したが、その後南部家がこの建物を無償で払い下げることに決定したので、先に受け取っていた代金が南部家から逸見に返還されている<sup>50</sup>。西村嘉は、それまで藩の「御内務」で行っていた旧藩主家と旧藩士との連絡が廃藩以後滞っていたのを、その連絡機関としての機能を書籍縦覧所が果たすことが期待されたので、南部家は建物の無償払い下げに応じたとしているが<sup>51</sup>、書籍縦覧所のために私邸を提供することは「御美名ニモ相成可申候哉」<sup>52</sup>というような交渉によって当時の南部家当主栄信の理解と協力が得られ、追加の資金や建物の提供が

行われたとすれば、逸見は、書籍縦覧所の設立という企てを、旧藩主家から旧藩士民に対する支援事業と位置づけることによって成功させたといえる。前年の1873（明治6）年9月に開校した八戸小学建設の際にも、南部家からの資金提供（献金）は行われているが、この八戸小学の建物は後の1929（昭和4）年7月に移転され、八戸市立図書館として使われることになる<sup>53</sup>。

このような、南部家と大仲間、旧藩主家と藩士との協議の場において、英明で知られる二代藩主直政の伝説が南部家の支援事業としての書籍縦覧所の由来として復活した（支援をとりつけるために逸見が復活させた）ともいえるが、一方で、先にあげた「書物無尽仲間」のような読書組織が、藩の存続も危ぶまれるような当時の時勢（時務）に応じるための藩士間の自衛手段として、早くも藩の草創期に存在していたことを示している伝承とも考えられる。

#### 4 書籍縦覧所と書籍館・図書館の接続

八戸書籍縦覧所は1874（明治7）年6月に開業したが、その後1880（明治13）年になって、そこに公立の書籍館が併設されることになる<sup>54</sup>。この八戸書籍館は、組織上は八戸町村連合立の公立であり、館長は弘観舎会頭のひとりで、この頃の第十七中学区取締の新宮興運であった。両館の組織は異なっていたが、活動は共同、蔵書も共有であった。統計上は来館者数だけが別になっているが、これは、書籍縦覧所の利用が有料であったのに対し、書籍館のほうは無料で運営されていたからと思われる<sup>55</sup>。このことからすれば、私立の書籍縦覧所に付属したかたちではあるが、明治10年末の『文部省第四年報』で文部省が公示した「公立書籍館ノ設置ヲ要ス」の趣旨に沿った無料公開の「公立書籍館」が、このときに八戸に成立したといえる。

その後しばらくは、八戸書籍縦覧所と八戸書籍館は並立（実質的には統合）したまま存続するが、1887（明治20）年に至って書籍縦覧所が経費都合により閉鎖、書籍館も閉館となる。経営母体である弘観舎は、1895（明治28）年に書籍縦覧所の運営を八戸青年会に委託し、これを受けて八戸青年会が八戸青年会図書館を設立して、それが1898（明治31）年に開館することになる。

八戸青年会とは、近代学校制度を拒否した北村益、湊要之助らによって、「文武両道を極め、東西の学術を研鑽する」<sup>56</sup>目的で設立された、士族の子弟ら87名からなる全寮制の総合学園である。発起人のひとりである湊要之助は、旧藩の代表的教育者・指導者であった枋内吉忠に師事し、1887（明治21）年には八戸書籍縦覧所の施設を利用して八戸義塾を開いた人物であるが<sup>57</sup>、書籍縦覧所が旧藩士の団体である弘観舎から旧藩子弟の教育のための組織である青年会に引継がれて存続したことは、そこに「公立書籍館」が併設されたことも含めて、この書籍縦覧所が、旧藩の教育政策や育英事業の継続として認識されていたことを示している。

但し、この「八戸青年会図書館」であった時期には、まだ弘観舎も書籍縦覧所も存続しており、「八戸青年会図書館規定」には「本館ノ蔵書ハ何人ト雖トモ借覧スルコトヲ得」「但シ館外貸出ハ本会会員及ヒ弘観社員又ハ会員及社員ノ保証アル者ニ限ル」<sup>58</sup>とあって、館外貸出は「大仲間」と同じく弘観舎会員の特権であったことがわかる。しかし、これ以降ずっと入館料が徴収されていないところからすれば、書物仲間のような会員制の組織ではなく、既に近代図書館として運営されるようになっていたものと考えられる。

1912（大正元）年になり、八戸町議会が八戸町立図書館設置を議決すると、弘観舎は八戸町に書籍縦覧所の書籍の寄附を申し出ており、これを基盤として、1913（大正2）年7月に、八戸町立図書館が設立されるに至る。ここに、18世紀以来続いた書物仲間の蔵書と伝統が、近代図書館に継承されたことになるが、書物の共同利用組織（書物無尽）としての書物仲間の特長も、公共図書館の概念と融合することにより、次代に継承されたといえる。

## おわりに

各時代の「書物仲間」については、その成立や変化の時期のそれぞれに、藩内にそのような読書組織を必要とする社会的背景があったことが確認されたが、書物仲間としての活動（藩士の意識改革、新しい知識・技術の学習と獲得）が直接、藩組織の存続に関わっていたといえる。すなわち、各時期の時代状況（時務）に応じるために、書物仲間が発生・変化したと考えられる。

読書組織としての「書物仲間」の特徴としては、読書会や同志的結社の活動だけでなく、書物の共同利用組織（書物無尽）としての機能を常に失わなかったことが大きく、このことが蔵書の散逸を防ぎ、共有の意識も高めて、近代につながったものと思われる。

八戸書籍縦覧所と八戸書籍館の利用者数の推移をみると、1874（明治7）年から1879（明治12）年までの、書籍縦覧所単独であった時期は、年間250人程度の利用であったものが、公立の八戸書籍館が併設されて以降急増し、1881（明治14）年に1200人、1882（明治15）年に3000人、1885（明治18）年には5000人を超えている<sup>59</sup>。しかし、運営が八戸青年会に移って八戸青年会図書館となった1893（明治31）年度の利用者数は181人となっており、以後減り続ける<sup>60</sup>。

このことは、「我八戸中普ク智識ヲ開ク」という趣旨で設立された書籍縦覧所も、実際には旧士族しか利用しない、旧藩時代の「大仲間」と同じような存在であったということを示している。そして、それが町村連合立の書籍館として、蔵書と施設を共用するようになった途端、一般市民の利用が増えたということは、だれでも気兼ねなく立ち入ることができる、万人に開かれた公立公営の書籍館（すなわち近代公共図書館）という概念が、一時的ではあるが、八戸の地で理解されたということであろう。その後の利用が極端に

減ったのは、八戸青年会図書館が、旧士族団体の私設図書館に戻ってしまった結果といえる。

「書物仲間」は、八戸における書物流通量の不足と、財政難による個人蔵書の不足を補う「書物無尽」として発生し、公的な相互扶助制度の一環として続けられてきたからこそ、その時々々の藩士の「時務」意識が発現する対象として活用されてきたといえる。八戸書籍縦覧所が開業した翌年の1875（明治8）年に刊行された福沢諭吉『文明論之概略』のなかに、「その時節と場所とを察するの働きを公智という」という言葉があるが、旧来の書物仲間を近代図書館へと転換・発展させたものは、まさに激動の時代を生きのびた八戸藩の「公智」であるといえるだろう。

書籍縦覧所から公立書籍館、青年会図書館を経て町立・市立図書館に至る変遷については、それぞれの運営の理念やサービス内容の変化を詳しく検討することにより、八戸における近代公共図書館思想受容の過程をより明らかにすることが期待できる。今回の成果をふまえて、以後検討を進めたい。

#### 〔注〕

1. 小川徹「前近代における図書館史はどう描けるのか」『図書館文化史研究』13号、1996年：p.1。
2. 『講座日本教育史 5 研究動向と問題点』第一法規出版、1984年：p.110。
3. 新谷恭明「明治期の中等教育に於ける二つの接続」『近代日本研究』31号、慶應義塾福沢研究センター、2014年：p.51。
4. 永末十四雄『日本公共図書館の形成』1984年：pp.74-75。
5. 伊東達也「県立図書館の成立過程における近世と近代の接続について：鍋島家による佐賀図書館の設立をめぐる」『教育基礎学研究』17号、2020年。
6. 「旧鹿兒島藩学制」『日本教育史資料』3：pp.282-286。
7. 『八戸市立図書館百年史』八戸市立図書館、1974年：p.23。
8. 「日本書籍館」『教育新誌』23号、汎愛社、1878年。竹林熊彦は、この記事を根拠のひとつとして八戸書籍縦覧所の由来を説いている（竹林熊彦「明治年間地方図書館の展望（一）」『図書館雑誌』7巻2号、1943年：p.21）。
9. 渡辺村男「八戸見聞録 卷ノ八」（木村久雄『現代語訳八戸見聞録』デーリー東北新聞社、2017年：p.307）。
10. 前掲7：p.74。
11. 木村久雄『現代語訳八戸見聞録』デーリー東北新聞社、2017年：p.211。また、文化7年の「仲間書物会宿書留」の中にも「宝暦三酉年」の記録がある（『新編八戸市史 近現代資料編Ⅰ』八戸市、2007年：p.160）。
12. 鈴木淳世「近世後期八戸藩の豪農による書物受容の特質」『歴史』122輯、東北史学会、2014年：p.78。
13. 小林文雄「武家の蔵書と収書活動」『歴史評論』605号、校倉書房、2000年：p.71。
14. 森越良『複写本八戸藩御目付所日記』2015年、八戸古文書勉強会『解説八戸藩目付所日記』八戸市立図書館、2004年。
15. 鈴木淳世「江戸時代の八戸城下における書物貸借組織の活動」『史の森』9号、東北大学東北アジア研究センター上廣歴史資料科学研究部門、2020年：p.5。

16. 『青森県史 資料編 近世5』 青森県、2011年：p.639。
17. 『八戸南部史稿』 八戸市、1999年：pp.227-235。「御家流武学濫觴」『新編八戸市史近世資料編Ⅲ』 八戸市、2011年：pp.234-238。
18. 「松前御加勢拾騎御備立式者分」 「八戸南部家文書」 寛政元年。
19. 『青森県史 通史編2 近世』 青森県、2018年：p.495。
20. 前掲19：p.497。
21. 「八戸藩の学制沿革 明治16年9月4日」 『新編八戸市史 近現代資料編Ⅰ』 八戸市編纂委員会、2007年：p.377。
22. 「八戸藩日記 文政十二年十月十五日」。
23. 「学校江御預御書物目録」 『新編八戸市史 近現代資料編Ⅰ』 八戸市、2007年：pp.78-81。
24. 前掲21：pp.377-379。
25. 前掲7：p.39。西村嘉は『八戸市立図書館百年史』 の前史部分の執筆担当者である。
26. 「書物仲間残欠」（前掲7：pp.43-45より引用）。
27. 前田勉『江戸の読書会：会読の思想史』 平凡社（平凡社ライブラリー）、2018年：p.71。
28. 田中優子『江戸はネットワーク』 平凡社（平凡社ライブラリー）、2008年：pp.10-18。
29. 前掲7：p.47。
30. 前掲27：pp.61-70。
31. 前掲27：pp.259-262。
32. 前掲27：p.185。
33. 前掲7：p.49。
34. 前掲7：pp.47-48。西村嘉は、蔵書印の調査により結社から書籍利用団体への転換の際に理顕印仲間の蔵書に一部変化があったことを指摘している。
35. 前掲7：p.50。
36. 『青森県史 通史編2 近世』 青森県、2018年：p.627。
37. 前掲36：p.616。
38. 『八戸市立図書館国書分類目録』、『八戸市立図書館漢籍分類目録』、前掲7：p.55。
39. 前掲7：pp.55-61。
40. 渡辺村男「八戸見聞録 卷ノ八」（木村久雄『現代語訳八戸見聞録』 デーリー東北新聞社、2017年：p.307）。
41. 「逸見興長書留帳」 『八戸市立図書館所蔵逸見興長資料』 所収（前掲7：p.62より引用）。
42. 前掲7：pp.68-72。
43. 前掲7：p.73。
44. 「はちのへ人物伝③ 栃内吉忠」 『デーリー東北』 1993年8月9日。
45. 前掲7：p.73。
46. 前掲8。
47. 前掲7：p.23。
48. 「書籍縦覧場設立趣意書」 『新編八戸市史 近現代資料編Ⅰ』 八戸市、2007年：pp.389-390。
49. 前掲7：p.63。
50. 南部家「御家扶所日記」（前掲7：p.42より引用）。
51. 前掲7：p.64。
52. 「書状」 書籍縦覧所の譲渡」 『新編八戸市史 近現代資料編Ⅰ』 八戸市、2007年：pp.384-385。
53. 『新編八戸市史 近現代資料編Ⅰ』 八戸市、2007年：p.375。
54. 『文部省第八年報』 の「明治十三年書籍館一覧表」には八戸書籍館と八戸書籍縦覧所が公私別に並記されている。

55. 前掲 7 : p.92。
56. 前掲53 : p.384。
57. 「はちのへ人物伝⑩ 湊要之助」『デーリー東北』1993年10月16日。
58. 前掲 7 : p.82。
59. 前掲 7 : p.91。
60. 『青森県学事年報』